

目 次

第一章	原始時代	
1	縄文文化	5
	東アジアと日本	5
	縄文土器とともに	6
2	弥生文化	8
	弥生土器とともに	8
	国々の発生	9
第二章	古 代 (一)	
1	古墳文化	11
	ヤマト王権の発展	11
	古墳文化	11
2	飛鳥文化	13
	自然宗教から社へ	13
	儒学・仏教の伝来	14
	聖徳太子	15
	飛鳥文化	17
第三章	古 代 (二)	
1	奈良時代の文化	19
	大化改新	19
	都城の造営	19
	通貨の鑄造	20
	国史・地誌の編纂	21
	遣唐使	21
	白鳳文化	22
	国家仏教	23
	天平文化	24
	学問・文学	25
2	平安初期の文化	26
	政治の刷新	26
	平安初期の文化	27
第四章	古 代 (三)	
1	平安中期の文化	29
	対外関係の変化	29

国風文化	29
仮名の成立	31
国文学の発展	31
浄土思想と美術	32
2 平安末期の文化	33
政権の公武転換	33
平安末期の文化	34

第五章 中世

1 鎌倉時代の文化	37
幕府の創設	37
武士の生活	38
仏教の革新	38
美術	40
学問と文芸	41
蒙古の襲来	42
2 室町時代の文化	43
北山文化	43
対外貿易	44
社会体制の変化	45
東山文化	46
庶民文芸	48
文化の普及	49
中世の琉球と蝦夷地	49

第六章 近世（一）

1 西洋文化との接触	51
ヨーロッパ人の東洋進出	51
鉄砲の伝来と南蛮貿易	51
キリスト教の伝来	52
2 織豊時代の文化	54
国家統一と商業・貿易	54
朝鮮出兵	56
安土桃山文化	56
南蛮文化	58

第七章 近 世 (二)

1	幕府の対外政策	59
	江戸幕府の成立	59
	家康の通商政策	60
	日本人の海外発展	61
	キリシタン禁圧	62
	鎖国	63
2	元禄文化	65
	文治政治	65
	学問の振興	66
	商業の発展	66
	町人文化の発達	67
	人々の暮らし	69

第八章 近 世 (三)

1	江戸文化の成熟	71
	化政文化の性格	71
	儒学	72
	文芸	72
	美術	73
	和食の発達	73
2	新しい学問	74
	国学	74
	洋学と自然科学	75
	新しい社会批判	77
3	開国と幕府の滅亡	78
	世界の情勢	78
	開港と攘夷論	79
	開国の影響	81
	大政奉還	82

第九章 近 代 (一)

1	明治維新	83
	新政府の革新	83
	文明開化	84
2	大陸への進出	86
	条約改正	86

工業化への進展	86
列強の世界政策	88
東アジアと日本	88
日清戦争	89
列強の中国分割	90
日露戦争	91
大陸政策の進展	91
3 近代文化の形成	92
宗教と教育	92
学問の発達	94
文化財の保護	95
近代文学の発達	95
音楽と演劇・美術	97
西洋スポーツの始まり	98

第十章 近代 (二)

1 2つの大戦(大正から昭和)	99
第1次世界大戦	99
第2次世界大戦	100
2 近代文化の発展	101
自然科学	101
思想と教育	102
文芸	102
美術・演劇・音楽	104
3 現代	104
戦後の日本	104
平成から令和へ	105
世界に発信する日本文化	106

【参考】

日本のユネスコ世界文化遺産	110
日本のユネスコ無形文化遺産	113
分野別略年表	115
(建築物・庭・彫刻・絵画・工芸・生け花・茶道・陶芸・宗教・ 思想・文学・歴史書・学問・舞台芸術・音楽・娯楽・スポーツ)	
歴史年表	巻末

第四章 古 代 (三)

1 平安中期の文化

対外関係の変化

遣唐使は平安朝初期にも派遣されたが、危険を伴う航海に比べて唐の衰退と共にその文化にも見るべきものが少なくなったとの菅原道真^{すがわらのみちざね}の建議によって、894年にこれを中止した。907年に唐は亡び、五代十国争乱の世となった。また奈良時代以来わが国に通交していた渤海^{ぼっかい}は926年に契丹^{きったん}に滅ぼされた。まもなく、朝鮮でも935年に新羅が滅びて、翌年高麗^{こうらい}が後百済^{ごくだら}を滅ぼして朝鮮半島を統一した。

このように、日本の近隣諸国は変動が激しく、その間に1019年刀伊賊^{と い ぞく} (女真族^{じょしんぞく}) の北九州来寇^{らいこう}などもあり、朝廷の対外的姿勢は極めて消極的となった。唯一、960年に中国を統一した宋^{そう}の商船が来航したり、これに乗って日本から巡礼僧が入宋する程度で、どの国にも公式の使者は派遣しなかった。

国 風 文 化

対外関係が稀薄になり、政権は藤原氏が独占して摂関政治^{せつかんせい}をおこし、これを中心とする貴族の優越的地位は確定した。荘園という彼等の経済的基盤も固まってくると、貴族は栄華な生活を送るようになり、彼等はその趣好に合わせて、これまでの内外の文化^{そしやく}を咀嚼^{こくふうぶんか}し、日本風の文化^{じょうせい} (国風文化) を醸成した。

貴族の住居は、以前の唐風の宮室建築^{からふう きゆうしつけんちく}から新たに寝殿造^{しんでんづくり}が成立した。屋根は勾配ゆるやかな檜皮葺^{ひわだぶき}で、中央に南面した寝殿^{しんでん} (正殿^{せいでん}) があり、

東・西・北たいのやに対屋ぜんていを設け、前庭おおぼにあたる大庭には広い空間つきの南に池や築山やまや流れながを取り入れた。床は板敷いきで部屋いたじの内では几帳きちょう・衝立障子ついたてしょうじ・屏風びょうぶなどを使い間仕切りとし、外部との仕切りには御簾みすや蔀戸しとみど・妻戸つまどなどが使われた。贅まきえを尽くした調度品まきえの中でも、蒔絵まきえを使ったものがこの時代こんにちに独特の進歩こんちを見せた。今日、寝殿造住宅こんちそのものは現存しないが、仕切りたてくに使われた建具はそれぞれその後も日本建築の中で使われていった。この頃の畳は座布団たてくの様に使われたり、寝具として使われたことが、絵巻物などに見られる。畳の大きさ・厚さ・縁へり（畳縁たたみべり）の柄がらがすでに身分の違いを表していた。のちの室町時代頃へりに書院造が普及してから、現在の和室のように部屋全体に敷かれ始めるようになる。

池しいに舟かんばんを浮べて詩歌管絃ゆうえんの遊宴うたあわせもあった。娯楽には歌合うたあわせなどもあり、国文学こくぶんがくと共に発達した。奈良時代にはすでに貴族の邸宅やのみずに鑑水やのみずや池など庭作りを楽しんでいた様子が発掘などで明らかにされているが、貴族にとって庭は儀式の場からこのような遊興の場へと変わっていった。寝殿造の庭園さ が ごしょは旧嵯峨御所だいかくじ（京都市大覚寺）の大沢池おおさわのいけ、神泉苑しんせんえん（京都市）などに遺構の一部が見られる。「作庭記さくていき」と言われる庭園を作る上での禁忌きんきや作庭方法さくていを記した書きが生まれたのもこの11世紀初頭とみられ、のちの庭園作りきんきに大きな影響を与えた。

衣服も国風化し、貴族の男子の服装は、儀式には衣冠束帯い かんそくたいをつけ、平時のうしは直衣かりぎぬや狩衣かりぎぬを着た。貴族も庶民も男は烏帽子えぼしを被っていた。貴族の女子は儀式には色とりどりの単衣ひとえを重かさねた十二単衣じゅうにひとえをつけ、平時ひとえは単衣ひとえや桂うらぎの上に小桂こうきを重かさね袴ひたれを履いた。庶民の男は直垂ちとせに動きやすい小袴しびらで、庶民の女子は小袖こそでに褶しびらをはおり腰布こしを巻いていた。貴族は絹の着物ちよまを着ることが出来たのに対し、庶民の布地は麻ちよま（苧麻）や植物繊維で

美術・演劇・音楽

1907年(明治40)、第1回文部省美術展覧(文展)が開催され、その流れは現在の日展につながる。1914年(大正3)になって、日本画界では日本美術院が再興され、よこやまたいかん しもむらかんざん やすだ ゆきひこ かわい ぎょくどう こぼやし こけい横山大観・下村観山・安田靉彦・川合玉堂・小林古径らが活躍し、洋画界では、文展とは別に自由な展覧会を催すグループが林立するようになった。いしい はくてい やましたしん たろう やすい そう たろう石井柏亭・山下新太郎・安井曾太郎らの活躍が知られる。

演劇界は近代劇が盛んになり、1924年、つきじ しょうげきじょう築地小劇場が創立され、新劇の中心となったが、社会主義的思想をもつ演劇の方向をとった。1914年には未婚の女性だけで構成される宝塚歌劇団が初の公演を行なった。

音楽界では作曲のやまだ こうさく こせきゆうじ山田耕筰、古関裕而、交響曲の代表的指揮者としてこの えひでまろ近衛秀麿らが現われ、洋楽の普及発達を促した。

3 現 代

戦後の日本

太平洋戦争での敗戦後、米国主力による連合国軍の占領下におかれ、その総司令部(GHQ)の指令を日本政府が実施する間接統治が行われた。非武装、民主主義に基づき戦争放棄、国民主権を謳った日本国憲法を制定し、全面的な革新(男女平等の普通選挙法、農地改革、教育改革、労働改革等)を遂行した。米ソ冷戦が鮮明になると、1950年(昭和25)の朝鮮動乱を機に、警察予備隊が発足し、4年後陸海自衛隊へと改組、航空自衛隊も新設された。

日本の主権は1952年、よしだしげる吉田茂首相を首席全権として調印されたサンフランシスコ講和条約発効後回復されたが、同時ににちべいあんぼじょうやく日米安保条約を結び

米軍の駐留が継続となった。1956年にソ連と国交が回復すると、国際連合へ加盟、国際社会への復帰となった。日米安保条約は1960年に改定され、日米共同で防衛義務を負うこととなった。1972年には日中国交正常化が実現し、更に6年後日中平和友好条約が調印された。戦後米国の施政権下に置かれた小笠原諸島は1968年（昭和43）に、沖縄は1972年（昭和47）に本土復帰を果たした。

朝鮮戦争による特需景気とくじやもあり、1950年代中盤から日本経済は電気製品、自動車製品などの組立工業や重化学工業を中心に飛躍的な高度成長を遂げた。1953年にテレビの本放送が始まったが、皇太子殿下が民間人を妃に選ばれ、1959年にご成婚のパレードが放映されたことで、国民大衆は国民の統合の象徴と言われる皇室に親しみを感じるようになった。続いて1964年（昭和39）に開催された東京オリンピック・パラリンピック、1970年大阪での万国博覧会、1972年札幌冬季オリンピックは戦後日本の復興を象徴する画期的な出来事であった。その後、日本経済はGNP世界第2位となるまで成長したが、米国の貿易赤字が増加すると1985年（昭和60）のプラザ合意によりドル安へと協調介入が行われた。急激な円高不況に対処するために実施された積極財政・金融緩和策の結果、景気拡大の一方、株式・土地への投機等によりバブル経済がもたらされた。

平成から令和へ

1989年（昭和64/平成元年）1月、昭和天皇の崩御により、皇太子明仁親王あきひとの即位で平成時代が始まった。この年は鉄のカーテンと言われた東西冷戦が終結を迎えたが、その後の湾岸戦争わんがんせんそう（1991年）、米同時多発テロ事件（2001年）など世界情勢の変動に伴い国連平和維持活動への参加問題で自衛隊の行動規範が問われることとなった。近隣諸国との間には、戦後処理に関連した諸問

【参考】

【分野別略年表】

建築・庭

建築・庭(1)

時代	建築物	庭
古代	竪穴住居(掘立式)*茅葺 高床式倉庫(堀立式)*茅葺 古墳(方墳・円墳・前方後円墳など)	*石を立て依代とする *磐座、磐境、神池、 神島
飛鳥	*礎石建て、本瓦(丸瓦)大陸より移入 *唐様の建築技法 *茅葺、板葺き、檜皮葺き 現存せず:飛鳥寺、斑鳩寺(法隆寺) 四天王寺(のち再建)	*仏教伝来とともに中国 ・朝鮮半島から 庭園文化伝わる *呉橋、須弥山 飛鳥京跡苑池
	白鳳 607年?法隆寺創建 (670年焼失?690年頃金堂再建) 706年法起寺三重塔	
奈良	天平 730年薬師寺東塔 739年法隆寺夢殿・伝法堂 741年国分寺・国分尼寺:現存せず 752年以前?東大寺法華堂 東大寺大仏殿(後に2回焼失・再建) (二月堂のちに焼失・17Cに再建) 710-793年唐招提寺金堂・講堂 747年新薬師寺本堂 正倉院正倉	*曲水・石組 平城京左京三条 二坊宮跡庭園 平城京東院庭
	密教 9C後半 室生寺金堂・五重塔 951年醍醐寺五重塔	*寝殿造の池泉庭園 神泉苑 嵯峨院大沢池
平安	国風 *京で町屋の出現 *檜皮葺→格が上がる *寝殿造(和様) 990年 法隆寺講堂再建 1051年 法界寺阿弥陀堂 1053年 平等院鳳凰堂 1124年 中尊寺金色堂上棟	*浄土式庭園 平等院鳳凰堂庭園 毛越寺庭園

歴史年表

日本文化・外交小史 JGA 日本観光通訳協会

年代	日本	アジア	中近東・アフリカ	ヨーロッパ	アメリカ・オセアニア
19世紀	1860 桜田門外の変			1861~1946 イタリア王国	1861~65 アメリカ、南北戦争
	1864 下関砲撃事件、長州征伐				
	1866 薩長同盟			1863 トーマス・クック、ツアー →現代的観光旅行の始まり	1867 カナダ、自治領成立
	1867 大政奉還、王政復古				1867 アメリカ、アラスカ買収
	明治時代(1868~1912)				
	1868 明治維新 五箇条の御誓文			1866 プロイセン・オースト リア戦争	
	1868 神仏分離令→廃仏毀釈				
	1869 版籍奉還		1869 スエズ運河開通(運営管理 英仏)	1870 プロイセン・フランス戦争	
	1871 廃藩置県			1871~1918 ドイツ帝国	
	1872 学制公布、国立銀行条例			1878 ベルリン会議 (東欧諸国独立)	
	1872 新橋・横浜間鉄道開通			1882 独逸伊三国同盟	
	1874 民撰議院設立の建白書			1882~2026予定 サクラダ ファミリア	1886 コロンビア共和国成立
	1876年 日朝修好条規				
1877 西南戦争	1877~1947 英領インド帝国	1880年代 ヨーロッパ諸国、 アフリカ争奪			
1889 大日本帝国憲法発布	1885~1895 清、台湾省設置		1884 ベルリン・コンゴ会議 (アフリカ分割)		
1890 第1回帝国議会					
1890 エルトゥールル号遭難事件			1889 エッフェル塔		
1894 領事裁判権の撤廃に成功			1891 露・仏同盟		
1894~95 日清戦争					
1895~1945 台湾統治時代					
1895 下関条約、三国干渉	1897 大韓帝国成立				
20世紀	1902 日英同盟成立	1900~01 義和団事件(清)			1901 オーストラリア連邦成立
	1904~05 日露戦争				
	1905 ポーツマス条約			1905 ノルウェー、分断独立	
	1910 幸徳事件(大逆事件)			1907 英・仏・露三国協商	